地名（ちめい）からたどる創作民話（そうさくみんわ）

豆辞典シリーズ　５
作絵：やまおか　みつはる

目　　次

１．弥平太村の五斗蒔：茨城県
（やへいたむらの　ごとうまき）
２．鵜の住居：岩手県
（うのすまい）
３．尻軽おんなと尻重おんな：岩手県
（しりかるおんなと　しりおもおんな）
４．太郎坊山と大火山：福島県
（たろうぼうやまと　おおひやま）
５．狐と狸の水あらそい：福島県
（きつねと　たぬきの　みずあらそい）
６．三十挺坂：熊本県
（さんじゅっちょうさか）
７．猿の顔はなぜ赤い：高知県
（さるのかおは　なぜあかい）
８．太郎と次郎と蛸娘：岩手県
（たろうと　じろうと　たこむすめ）
９．代太郎と草三郎：大分県
（だいたろうと）　くささぶろう）
１０．女子畑：大分県
（おなごはた）
１１．山姥の赤子：和歌山県
（やまんばのあかご）

ここに掲載した地形図は、国土地理院発行のものを使用しました。

１．弥平太村の五斗蒔

（やへいたむらの　ごとうまき）

茨城県つくば市弥平太ほか

そのむかし、つくば山が、すぐ近くに見える、ある村の南のはずれにいっけん家があっての。

そこに頭のてっぺんが、ちょっとだけもりあがった、元気な子どもがすんでいての。

名まえを、弥平太（やへいた）といったんじゃ。

弥平太には、おっとうも、おっかあもいなかった。

弥平太が、いつからこの村の、この小さな家に、すむようになったのかは、村人のだ一れもが知らないことだった。

弥平太は、同じ年ごろの子どもたちと遊ぶこともなく、村の仕事の手つだいをしては、おれいにたべものや、きがえをもらって、静かにくらしていたんじゃと。

さて、あるときから、この地方は天気のわるい日が多くなってな、野菜（やさい）や米のしゅうかくが、少なくなったんだと。

そして、あらそいごとも多くなったそうな。

それを、どこかで見ていたかのように、夜になると鬼（おに）が、村にくるようになってな。鬼たちは大声を出しては、村人をおどろかして、食べ物を持ちさるようになったんだと。

その鬼たちは、つくば山のおく深くにある、どうくつからやってきたんじゃと。

こまった村人たちは、鬼をおいはらおうとして、そうだんをはじめたと。

「たくさんのたべものをわたして、二どと村へこないようにたのんでみたらどうだべ」

「おれたちでさえ、食べるものがないのにか？」

「落としあなを作って、こらしめたらどうだべか」

「そんなことしたら、よけいに、わるさをされるじゃろ！」

「つくば山の神様（つくばさんのかみさま）に、おねがいしたらどうだべ」

「つくば山の神様は、えんむすびの神様だで、むりだっぺ」

村人は、しんけんにはなしあったけれど、これといった、よい考えはうかばなかったんだと。

そうこうしているうちに、秋が近くなってな。春にうえたいねは、やっとこさ、こがね色になって、いねのあたまは少しずつかたむいてきたんだと。

かり入れの日が近づいてきたんじゃ。
みのった米や麦（むぎ）を鬼にもちさられたら、村人はさむい冬がすごせない。
村人は、しんぱいでたまらなかった。

ちかくにすむ村人からそのことを聞いた、弥平太（やへいた）は、村人の前で、こういったんだと。
「ぼくに、いい考えがあります。鬼におねがいしてきます」
「弥平太よ、どんな方法で、おねがいするのかな？」
村一番のおとしよりで、“しょうや”でもある、美祢（みね）じいさんがきいたんじゃが。
「……」
弥平太は、なにも考えをいわないで、ただ、「ぼくに、まかしてください」というだけだったんじゃ。

美祢（みね）じいさんは、「わけもなく、子どもに、まかせるわけにはできない！」と、弥平太のもうしでをことわった。

鬼をおいはらう、よい考えがうかばない村人と美祢じいさんだったが、もういちどそうだんをはじめた。
でも、村人がそうだんするへやからは、「うーん、どうしよう」という、声がきこえるばかりだった。
「しょうがないなあ、こうなったら弥平太にまかせてみるべか」
と、美祢じいさんがいいだした。
「そうさな、たんのでみるべ！」
「たのんでみるべ！」
村人もいった。
美祢じいさんが、弥平太をよんで、おねがいすると、「それでは、三日だけ待ってください」

といって、つくば山へむかったそうな。
「たのんでみるべ！」といった村人たちだったが、「子どもに、なにができるじゃろうか」と、あまりしんようしていなかった。

そのごの美祢（みね）じいさんはというと、いつものように、村のだれよりも早おきし、お日さまのほうをむいて手を合わせ、村人のしあわせをおいのりしていた。
そして、三日がたった。
いつもおいのりする、お日さまのほうこうを、ふと見ると、にわ木のえだにむすびつけられた紙があった。
おもてには『美祢（みね）じいさんへ』と大きく書かれた手紙じゃった。
じいさんは、いそいで紙をひろげた。
そこには、こう書かれていたそうな。

「美祢（みね）じいさんと村のみなさんへ
鬼たちは、もういたずらをしないでしょう。
ですが、やくそくしてほしいことがあります。
この世には、みなさんから見ると、みにくい顔の鬼人（おにびと）の世界もあることを知ってほしいのです。

鬼人たちは、ふだんは山のおく深くにすんでいます。ところが、この春ごろから、みんさんの村がさわがしいので、鬼（おに）たちは里へでてみたのです。
そうすると、私たちを見ると『鬼だ、鬼だ』とおとなも子どもも、はやし立てたので、わたしたちは、いたずらをはじめたのです。
どうぞ、私たちを見て、『鬼だ、鬼だ』と、さわぐのは、やめてください。
顔や体は、みなさんとちがいますが、やさしい心の鬼もいれば、あたたかい心をもった鬼も

います。

　村人の中には鬼人よりも、みにくい心をもった人もいます。もちろん、鬼の世界にもいますが、それは少しです。　鬼より」

　美祢（みね）じいさんは、村人を集めて手紙をよみ、鬼人のねがいをつたえたんだと。
　そして、あいずの花火を二つあげたそうな。
　よく朝になると、つくば山につづく道から、たくさんの鬼人がな、美祢じいさんの村にやってきたんだ。

　村人たちは、えがおでむかえ、そしておたがいに手をにぎった。
　美祢じいさんの前には、弥平太（やへいた）にそっくりだが、頭のてっぺんに、つのがある小鬼（こおに）がやってきて、いったそうな。

「“しょうや”さん、私たちは、もう、けっしていたずらはしません。ですが、さらにひとつだけおねがいがあります」
「どんなことかね」
「一年に一度、秋のしゅうかくのじきに村人と鬼人（おにびと）が楽しく、すごせるようにしてください。そして、私たちと、つな引きをして、もしも鬼人（おにびと）が勝ったときには、ほんの少しの食べ物を、わけていただけませんか」
「いいとも」
　美祢（みね）じいさんは、そう答えながら、小鬼に、「弥平太！」と、こえをかけてみた。しかし、へんじはなかったが、美祢じいさんには弥平太に見えたと。

　そして、村のまん中にある橋の上で、つなひきが始まったんだ。

　村人からは、うでにじしんのある若者がえらばれ、右へ、左へ“つな”がひかれてな。
　まわりで、おうえんする村人も、鬼人もおおさわぎだ。
　そして、この年は、鬼人が勝ったんだと。
　村人と鬼人は楽しい一日をすごし、鬼人は、お米を五斗（７５キロほど）だけもらって山へ帰っていったんだと。

　それからというもの、まい年のように秋のしゅうかくのじきになると、鬼人が山から下りてきては、つなひきをするようになったんじゃ。

「どうしてかなー」
つなひきは、いつの年も鬼人の勝ちだったと。
　そして、いつの日か、このちほうのてんこうもよくなっての、しゅうかくも多くなったそうな。村には、あらそいごともなくなり、わらい声が多くなった。
　そんな年の秋からじゃろうか、鬼人のすがたがみえなくなったんだと。

　それからは、村人がふた手にわかれて、つなひきをすることが始まったそうな。
　そのころから、美祢じいさんの村は、「弥平太村（やへいたむら）」とよばれるようになってな、つなひきをして、“もちまき”をする近くの橋を「五斗蒔（ごとうまき）橋」、村人の気持ちを知りたいと、鬼の弥平太がすんでいたあたりを「鬼が窪（おにがくぼ）」とよぶようになったとさ。

　さて、このあたりの村ではの、今でも「村はずれのいっけん家には、かならず鬼人がひとりすんでいて、村人が楽しくくらしているか、あらそいごとがないかと、村のようすをみているんだ」と。

茨城県つくば市弥平太（やへいた）
1/25,000 地形図水戸 15 号の２「上郷」

茨城県つくば市五斗蒔（ごとうまき）
1/25,000 地形図水戸 15 号の２「上郷」

２．鵜の住居
（うのすまい）
岩手県釜石市鵜住居

そこは、北国の海岸に近い村でな。
平地には大きな森があり、海鵜（うみう）と姫鵜（ひめう）がすんでいたと。
海鵜も姫鵜も､海へ出て小魚をとっては､「ねぐらの森」もどる生活をしていてな。海には小魚が多く、「ねぐらの森」にはトビやカラスなどのてきもいなかったので、楽しくくらしていたんだと。

昼の時間がずいぶん長くなった、ある日のこと。海鵜がいつものように、おいしい小魚をさがしに海岸へ向かっているとな。海の向こうから、風を切るように飛行をする鳥が近づいてきたそうな。

南の国から、一年ぶりにやってきたツバメだった。海鵜のすがたを見るとな、ツバメは声をかけてきたそうな。
「海鵜さんよ、この海岸へきたのは初めてなんですが、少し教えてくれますか？」
「なんだい、ツバメくん。体がずいぶんよごれているね。遠くからやってきたんだろうな」
「そう、なん日もかけて南の島からやってきた

んですよ。どこかに、子そだてをするのによい、清潔なねぐらはないかなーと、思ってね」
と、夫婦のツバメはいったんだと。

「そうね、ぼくたちがすむ、『ねぐらの森』はどうかな。大きな木が生いしげって、それはそれはよいところだよ。」といって、海鵜（うみう）は、森があるほうがくを教えたんだと。
「うーん、ありがとう」
　ツバメは、つかれた体をふりしぼって、しばらく飛んで行くと。こんどは向こうから姫鵜（ひめう）がやってきたそうな。

　ツバメはねんのため、もう一度聞いてみることにしたんだと。
「どこかに、子そだてをするのによい、静かなねぐらはなかね。姫鵜さん」
　姫鵜はいった。

「私たちがすむ、『ねぐらの森』はどうだろうかな。トビやカラスもいない静かな森でね、それはよいところなのよ。」といって、姫鵜も、おなじ森のほうがくを教えてくれたそうな。

　それで、ツバメの夫婦は教えられたとおり、『ねぐらの森』に向かったんだと。しかし、どこにも清潔な森などないんだな。
　教えられた場所にあった森の木は、鳥のふんで真っ白によごれていたんだ。ツバメの夫婦（ふうふ）はあきれてしまった。だけど、長たびにつかれたツバメはな、気に入った木を見つけると、掃除をして、ひとねむりしたそうな。

　夕方になると、海鵜（うみう）も海鵜（ひめう）も森に帰ってきたそうな。ところが、そのそうぞうしいことといったらない。ツバメはとてもがまんできなかった。

「海鵜くん、姫鵜さん。清潔で静かな森だなんて、うそだね！」というと、ツバメの夫婦は、その日のうちに『ねぐらの森』をにげ出してしまったんだと。

　それからというもの、ツバメの夫婦は、「『ねぐらの森』は、ふけつでそうぞうしいのよ。とても、まともな鳥のすむところではないわ」と、なかまたちにいいふらしたんだと。

　そしてしばらくの間は、どのツバメも、す作りの季節になると、低空飛行（ていくうひこう）しながら、この歌をうたうようになったそうな。

　ふけつなすまいは、鵜のすまい
　うるさいすまいは、鵜のすまい

　このことが鳥たちの中で、ひょうばんになってな、それからというもの、海鵜と姫鵜ははずかしくて、この森にはすむことができなくなったそうな。

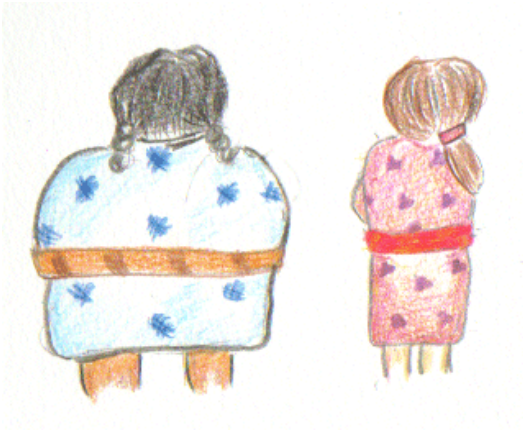
　海鵜ははずかしさで白い顔になり、すまいはだんがいの上に、姫鵜もはずかしさで赤い顔になり、はなれ島にすむようになったんだと。
　そして、ツバメがにげ出した、あの「ねぐらの森」のあたりを、「鵜住居（うのすまい）」とよぶようになったと。

　ツバメはというと、清潔で静かな家庭ののき下をさがしては、すむようになったんだと。
　だから、ツバメが巣作り（すづくり）している家は、清潔でやさしい家庭のしょうこなんだとさ。

岩手県釜石市鵜住居（うのすまい）
1/25,000 地形図一関１号の１「釜石」

３．尻軽おんなと尻重おんな

（しりがるおんなと　しりおもおんな）
岩手県釜石市女遊部



春のおとずれは、なの花が、冬のかけ足は、川を上る鮭（さけ）のむれが知らせてくれる、

北国のお話じゃ。

お話のはじまりとなる村は、東の川と西の川にかこまれたところにあってな、どこへ出かけるにも、川をわたらなければならないというところだったのさ。

そしてここには、なぜか女子（おなご）だけがすんでいた。

そんな川にかこまれた土地には、ちっちゃなお尻（しり）の「尻軽（しりがる）おんな」たちのすむ村とな、どっしりお尻の「尻重（しりおも）おんな」たちがすむ村があったんだと。

尻軽おんなたちはというと、東の橋さわたった先にある、山に入って鉄砲（てっぽう）うちをする男衆（おとこしゅう）の村にの、まいばんのように、遊びに出かけていたそうな。

尻重おんなはというと、東の橋から男衆たちが遊びにきても、けっして家には入れなかったんだ。

それよりも、西の橋をわたった先にあるじいさまのいるむらへいっては、とれた野菜（やさい）を売って、くらしていたんだと。

その村が秋をむかえたある時、もうれつなあらしが二日も続き、この土地にかかる東と西の二つの橋が一度に流されてしまったんだと。

橋（はし）をうしなった尻軽おんなたちは、それでも舟を使って、男村に遊びに出かけたそうな。

いっぽうの尻重おんなはというと、舟を使って､西のとしより村のじいさまたちのところへ、ようたしに出かけようとしたんだが、小舟はいくらも進まないうちに、ずぶずぶとしずんだそうな。

みんなの尻（しり）の重さが、わざわいした

んだな。
　魚が売れないじいさまたちと、野菜が売れない尻重おんなたちは、ふだんどおりの生活ができないので、さっそく、橋（はし）作りのそうだんを始めたそうな。
　じいさまたちは、力を合わせて木材を切り出した。
　女衆（おんなしゅう）はというと、かけ声もいさましく、じょうぶで重い尻を使ってくいを打ちはじめた。西の橋は、またたく間に工事が進んでな、冬がくる前にりっぱな橋ができ上がったんだと。

　東の橋（はし）はというと、流されたままで、冬が近づき、舟での行ききもままならなくなったそうな。

　尻軽おんなたちは、毎日の食べものにもこまるようになった。男衆（おとこしゅう）とともに、やっと橋作りを始めようとそうだんをしたんだと。
　ところがな、力を合わせない尻軽おんなと男衆では、思うように木材がはこべなかった。
　もちろん、尻軽おんなのやわらかいお尻ではな、くい打ちもできなかったと。だから、雪がちらついてきたが、橋作りはいっこうに進まなかった。

　尻軽（しりがる）おんなと男衆（おとこしゅう）は、しかたなく、尻重（しりおも）おんなと、じいさまたちに助けもとめにやってきたそうな。
「木材のはこび方を教えてくれねべか」
「橋の作り方を！」
「重い尻で、くい打ちを手伝ってくれねえか」
　人のよい、尻重おんなとじいさまたちはな、

橋作りをたすけることにしたんだと。
　みんなで協力したからな、雪がつもる前には、橋はできあがったそうな。

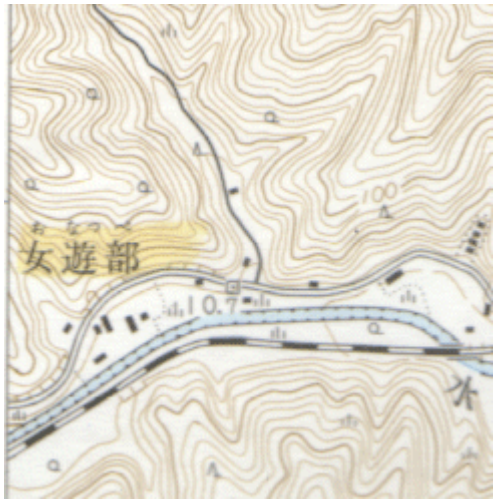
　おかげで、尻軽おんなも男村へかようことができるようになっての、よろこんだのだが、もう遊びのためにかようことはなくなったと。

　りっぱにできた東と西の橋。それからの橋のしゅうりなどは、女子だけではできないからの。
　東となりにすむ男衆（おとこしゅう）か、西となりにすむ、じいさまたちに助けてもらうことにしたんだと。

「ええーい、めんどうだ、みんないっしょにすむべい！」
「そうせば、海のものも、山のものも、畑のものも自由に手に入るべ！」

　そういうことになっての、それからというもの、二つの川にかこまれた村にはな、じいさまも男衆もいっしょにすむようになっての。おんなたちはけっこんして、たくさんの子どもを作ったそうな。
　もちろん、尻軽おんなも男衆も仕事にせいを出すようになったそうな。
　じいさまたちも、しんせつにしてもらっての、ながいきしたと。

　東の橋のこのあたりは、いまでも「おなっぺ（女遊部）」とよばれているけどな、尻の重い「おっかあ」ばかりになったんだと。（08.09 更新）



岩手県釜石市女遊部（おなっぺ）
1/25,000 地形図一関１号の１「釜石」

４．太郎坊山と大火山

（たろうぼうやまと　おおひやま）
福島県伊達郡月舘町、太郎坊山
福島県相馬郡飯舘町、大火山

むかしむかし、北国のある森に、太郎坊山（たろうぼうやま）と大火山（おおひやま）という山がならんでいたそうな。
太郎坊山は、森の多い、みどりが美しい山であった。となりにそびえる大火山はというと、先ごろ山火事にあってな、山の大切な森がもえてしまったんだと。だから、はげ山でな、小さな木しか生えていなかったそうな。

そんな太郎坊山は、大火山にあうとな、
「やい、大火山寒いだろう、ハゲ、ハゲ、ハゲのはげ頭、北風ふいて、つめたからろー」
などと、ひやかしていたんだと。

大火山はというとな、太郎坊山のひやかしなど、あいてにしていなかった。
それでも、かおをあわすたびに、
「ハゲ、ハゲ、ハゲのはげ頭、北風ふいて、つめたからろー」
と、いわれるもんでな、ついに大火山は、かおをまっかにして、太郎坊山にしゃべったんだと。
「やい、太郎坊山、いまにみていろ！　これから南の国へ行って、森の木を大きくして、また、ここへもどってくるからな」
とな。
そういうと、大火山は「のっし、のっし」と、かけごえをかけて、あせをながしながら南の国へと向かおうとしたんだと。

それから十年ほどたった。
太郎坊山がよーく見ると、大火山は、まだ目の前にいた。

その大火山に向かって、太郎坊山がまたいったそうな。
「なんだ大火山、まだ、そんなところにいたのか。南の島行きはどうなったんだ」
「よけいなおせわだ。きっと、南の国へ行って、森の木を大木にして帰ってくるんだ」
大火山は、十年前とおなじことをしゃべったんだと。
そののちも大火山はの、太郎坊山とかおをあわすたびに、「南の島行きはどうなったんだ！」といわれつづけた。
それでも大火山は、「のっし、のっし、のっし」と、かけごえをかけて、大あせをながしながら、南の国へと向かおうとしていたと。

それから、なん年もたった。
百年もたっただろうかの。
心もち動いたようにも見える大火山にむかっ

て、太郎坊山がいつものように、ひやかしたそうな。
「おーい、大火山。まーだそこにいたのか」
「よけいなおせわだ！」
　そして、大火山はつづけてしゃべったそうな。
「ぼくはね、この百年間、君がねているうちに、南の国へ行き、朝になるとまた元の場所に帰っていたんだ！」
　いくらか、みどりがこくなった頭をなでながら、じまんそうにしゃべったと。

「そんなことができるはずはないだろう。
おれは、大火山のことを、ずーーとここで見ていたんだから。
　だいいち、南の国へ行ってきたわりに、あたまのみどりは、そんなにかわらないようだな」
「そうかなあー」
と、じしんありそうに大火山がしゃべったと。

「それじゃあ太郎坊山よ、キミのうら山はどうなっているか、見たことがあるかな？」
　そういわれて、太郎坊山は、あわてて手を後ろにまわしてみた。
　すると、なにか、ざらざらしたようなかんじだった。前にもどした手にはな、かれえだや土がびっしりついてきた。
　日が当たらない北がわのしゃめんは、すっかりはげ山になってしまっていたんだ。それに、よーく見ると南しゃめんの森の木も、すっかり年おいてしまっていたんだと。

「それなら、キミはどうだというんだ」
　太郎坊山は、大火山のじしんありげなようすを見ながらな、くやしそうにいったそうな。
「ボクかい、ボクの後ろすがたを見てみたいか？」
　そういうと大火山はな、大きな体を「のっし、

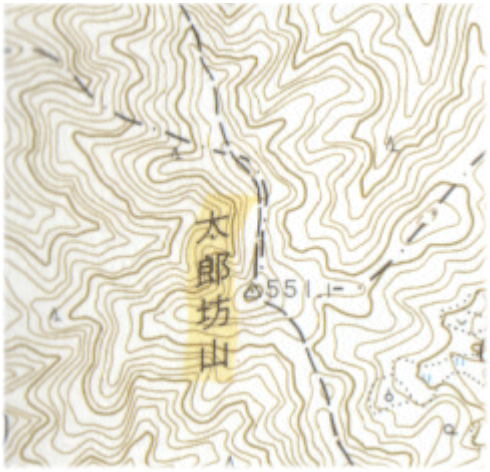
のっし」のかけごえで、動かし始めたんだと。
二時間もすると、太郎坊山の目に、大火山のせなかが見えたと。

　大火山がくるりと動いたことにもびっくりしたが、もっとおどろいたのは、北がわのしゃめんにりっぱな木が、びっしり生えていることだったそうな。

　では、大火山が、ほんとうにまいばんのように南の国にいって、はげ山をみどりの山にしたのだろうかの。
　これは、ふかい森の山たちだけが知っている

ことで、ないしょのことなのだがの、こっそりほんとうのことをおしえてあげようあげよう。
　じつはな、大火山が「のっし、のっし」のかけごえで、南へ行こう、南へ行こうとがんばっているうちにな、自分の体が少しずつ動くことに気がついたそうな。
　少しずつからだをかいてんできることもな。
　それで、「のっし、のっし」のかけごえで、からだを動かしては、からだをお日さまにまんべんなくあてて、みどりの多い山にしたそうな。
　だがな、太郎坊山には、それは少しも知らないことだったと。

　それからというもの、この地方のどりょくする山たちはの、年に数ミリメートルずつだが、グルグルと動いていての、北のしゃめんでもみどりが多いのだと。
　そうそう、この森ではの、よるになって耳をすますとの、「のっし、のっし」のかけごえが、たくさんきこえてくるそうじゃ。
「おおこわ」
　（2008,9 更新）



福島県伊達郡月舘町、太郎坊山
1/25,000 地形図福島 6 号の 2「萩平」

福島県相馬郡飯舘町、大火山
1/25,000 地形図福島 6 号の 2「萩平」

５．狐と狸の水あらそい
（きつねと　たぬきの　みずあらそい）
福島県伊達郡川俣町、井戸神、水境

　冬には、雪がたくさんふるある山里（やまさと）に、狐（きつね）の村と狸（たぬき）の村が、となりあわせにあったそうな。
　狐はな、ネズミや小リスなどをつかまえて食べていたが、それにもあきたときは、とうげをとおる旅人（たびびと）をおどろかしては、持

ち物の中から食い物をさがして、はらをふくらませていたんだと。

狸はというとな、ふだんは“やまいも”や“のいちご”などを食べていた。これも、ときおりは里へ下りて、村人が大切にしている畑の作物をしっけいしては、おなかが丸くなるまで食べていたんだと。
もしも、うんわるく畑で人間につかまってしまったときには、葉っぱにばけたり、お金にばけたりしてにげて帰っていたんじゃ。

そんな狐と狸がすむ山里。
この年は、いつになく雨の少ない日が続いたそうな。
狸が水あびをしたり、狐がのみ水にする小川は、小さな流れになってしまった。
狸が水あびをすると、狐ののみ水はなくなったんじゃ。また、狐がのみ水をはこぶと、狸の使う水はなくなった。

そこで、狐はな、夜のうちにこっそりと上流（じょうりゅう）で水をせき止め、狐の村へはこんだんだと。
よく朝、いつもの小川にやってきた狸たちは、ひからびた岩だらけの岸を見てびっくりした。体についた、よごれを落とすことが出きなかったんじゃ。

その夜、狸たちはというと、いつもの小川のさらに上流に集まり、少なくなった水をせき止めて水あびをしたんだと。
そして、よく朝。こんどは狐たちが、まえに自分たちがせき止めた岸にくると、そこは砂だらけ。小さな流れも、どろだらけでのみ水にはならなかったんだと。

おこった狐は狸の村に向かって、狸と狐のけんかが、おきたそうな。
狸（たぬき）の丸いはらをけ飛ばす狐（きつね）、狐のしっぽにかみつく狸。狐と狸のあそいいは、いつまでも続いたと。
さいごには、狐も狸もきずついての、つかれはてて、やっと静かになったそうな。

そのとき、狐と狸のあらそいを木のかげから見ていた「井戸の神」がでてきての、こういったんだと。
「狐（きつね）と狸（たぬき）よ、よく聞きなされ。雨が少ないときに川がかれるのは、あたり前のこと、そのときこそ、なかよく水を使いなされ」

そして、続けていった。
「これから、私がこの“つえ”でさす場所をほり、井戸（いど）を作りなされ。そうすれば、日でりのときにもこまらないだろうよ」
と、いいながら、井戸の神はな、小川の先の少し開けた草はらに“つえ”を立てると、森の中にきえてしまったそうな。

狐と狸はそうだんしてな、一日交代で井戸ほりを始めることにしたんだと。
最初は、狐のじゅんばん。

狐ははじめこそ、ものもいわずにほっていたそうな。
「ほんとうに水が出るのかなー」
「こんなかたい石では、ほれるはずがない」
一時間もすると、すっかりあきらめて休んでしまったんじゃ。
よく日の井戸ほりは、狸のとうばん。
「こんなかたい石の下から、水がでるはずがない」
「手が、まっ赤にはれて、これではおいしいごちそうも食べられなくなる」
などといっては、やはり一時間もしないうちに井戸ほりを止めて、昼ねをしてしまたんじゃ。
そんなことでは、一週間たっても井戸は少しも深くならなんだ。

そうしたある日、雨がふり出したんだと。
井戸としてほった、ほんの二、三十センチメートルほどのあなには水がたまったとき。
「井戸に水がたまった」
「たまった、たまった」
狐も狸も、そういって井戸ほりをやめてしまったそうな。
しかし、たまった水は、見るみるうちに土の下にしみこんでしまった。
ところが、そのよく日からは、こんどは大雨になったが、やはりほりかけの井戸にたまった水は、しみこむばかりだったんじゃ。

「そうだ、小川にはたくさんの水が流れているはずだ」
「そうだ、そうだ」
この声に、狸も狐もぞろぞろと小川をめざした。
ところが、どうしたことだろう。
そこには、いつもの小川の流れはなかったん

だと。

木のかげから、これまでのようすを見ていた「井戸の神」はおこってしまってな。
きうのゆうがた、小川に”つえ”を投げ入れたんじゃ。
そうすると、山からの水を集めた、あの小さな流れがな、はんたいの谷へ流れるようになったんだと。
それっきり、狸の村にも、狐の村にも水は流れなくなってな、狸も狐もこの村をすてて、もっと山おくにうつりすむようになったんだと。

今も、小川の流れはかわっていないんじゃが、のちに里からこの近くにすみついた人間はな、「井戸の神」の話を聞いての、井戸をほり、日でりのときでも、水の心配なしにくらしているんだと。

それぞれのことがあったしょうこに、「井戸の神」、「水境（みずさかい）」という土地の名が、ここに残っているんだとさ。
もちろん、地図には水の流れがかわったしょうこもね。

福島県伊達郡川俣町井戸神
1/25,000 地形図福島 6 号の 2「萩平」

福島県伊達郡川俣町水境
1/25,000 地形図福島 6 号の 2「萩平」
（地形図からは、河川流路が大きく変更されたようすが見えます）

６．三十挺坂
（さんじゅっちょうさか）
熊本県葦北郡芦北町三十挺坂

戦国時代(せんごくじだい)のことじゃった。国ぐにでは、いくさがたえなかった。

肥後（ひご）の国のとある殿様（とのさま）はな、いくさにそなえて商人（しょうにん）から、”てっぽう”を手に入れることにしたそうな。

てっぽうを買ってくるようにめいれいされた兵（へい）たちは、みなと町の商人から十ちょうのてっぽうを手に入れると、城をめざして道を急いだそうな。

ところが、行き帰りにとおる峠（とうげ）はな、夜になると、とてもぶっそうなところだったんじゃ。だから、たとえ兵であっても、明るいうちに通りすぎたかったんだと。

「暗くなったのー」
「ぶっそうだから、みんな、少し急ごうぞ」

しかし、峠をこえるころにはな、あたりはうすくらくなってしまったんじゃ。

兵たちが、大きな”くすのき”が見わたせるところまでのぼってくるとな、向こうから、たくさんの火が近づいてくるのが、見えたそうな。

「てきの火だろうかの？」
　兵たちは、あわててものかげにかくれたと。
「なんだ、なんだ」
「なんの光だろう？」
「となりの国の、てきかなー？」
　おそるおそる、木のあいだからのぞくとな、それははな、きものすがたの女狐（めぎつね）とおおぜいの狐（きつね）をのれつだったそうな。

　そして、兵たちは、女狐の美しさに見とれてしまたっんだ。だれかがいった。
「狐のよめ入りだ」
「きれいな、はなよめだのー」
　その時のことじゃ。光がまたたいて、兵たちはいっしゅんだけ目がくらんだそうな。そのしゅんかんにおきたのだろうかの。
　とにかく、もとにもどった時にはな、買いもとめた十ちょうのてっぽうは、小えだのたばになってしまったそうな。

　おどろいた兵たちは、付近をくまなくさがしたんじゃが、てっぽうはどこにもなかったんだと。しかたなく、てっぽうが、ばけてしまったと思われる、木のたばをせおって城へ帰り、殿様に、すべてをほうこくしたそうな。

「そんなばかな話はあるもんか､おまえたちは、お金をほかに使ってしまったのだろう」
　おこった殿様（とのさま）はな、兵（へい）たちを、とうげにつれてゆき、とうげの大きなクスの木の下で、うちくびにしたそうな。

　殿様は、あたらしい兵に命じて、ふたたび、十ちょうの“てっぽう”を買うことにしたんだと。

　ところが、こんどもおなじことがおきたそうな。兵たちは同じように、そのようすを報告したんじゃが、殿様はしんじなかったそうな。
「ほんとうに、狐のよめ入りのれつが！」
「そして、てっぽうが小えだにかわってしまったのです」
「おゆるし下さい」
　と、兵たちは、口ぐちにゆるしをお願いしたんじゃがな、殿様は聞き入れてくれなかったんだと。
「おまえたちは、だいじなお金を使って、みなと町で酒を飲み、遊んできたのだろう」
　怒った殿様は、こんども兵たちを峠でうち首にしたそうな。

　気が静まらない殿様はな、こんどはけらいの兵をつれて、てっぽうをかいもとめに、みなと町に向かったんじゃ。
　帰り道、峠に近づき、くすのきが見えてくると、これまでの兵たちが話してきたこととおんなじことがおきたそうな。

　それどころか、よーく見ると、はなよめをおともする狐はな、かた足がないものや、かた目のものなど、あちこちに“ほうたい”をまいた狐ばかりであったんじゃ。
　そして、そのうしろには、うち首にされた兵の顔も見えたそうな。
「わー」
「たすけてくれー」
　殿様も、ともの兵もな、いちもくさんに、そしてころげるように峠（とうげ）を下りたそうな。しかし、走っても、走っても城にたどりつかなかったんだ。

すっかりつかれきった殿様と兵たちは、坂道のとちゅうに、へたりこんでしまった。
ところが、不思議なことに、そこは大きなくすのきのある峠じゃった。
目の前には、たくさんの骨（ほね）がつみ上がっていた。

おどろいてたおれこむ殿様と兵たちを、金色に光る目をもった女狐と、きずついた狐たちが取りかこんだんだと。
「ゆるしてくれ、私がなにをしたというのだ」と、殿様がいうと、女狐（めぎつね）が続けていったそうな。
「なんにもしてないというのですか」
「てっぽうをもとめて、なにをしようとしているのですか」
「…」
「人間たちのいくさで、どれだけ多くの狐が、いや動物たちがしんでしまったか。そして、あなたは、またいくさを始めようとしているのですね」
光る目の女狐がいった。
取りかこむ狐たちは、いくさのまきぞえできずついたものや、なくなったものの亡霊（ぼうれい）じゃった。

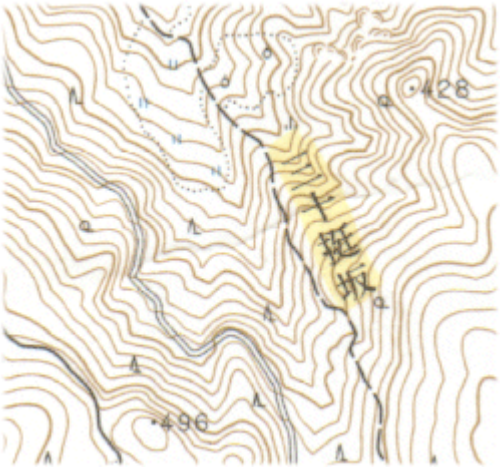
それぞれの目が光りかがやき、そして、てっぽうをはこぶことや、いくさを止めるように、せまった。
亡霊（ぼうれい）狐たちが、殿様と兵たちにせまってきた。
「いくさをやめろー！」
「友だちをかえせー！」
亡霊（ぼうれい）は、ふるえる殿様と兵たちの上からもせまり、光る目は血（ち）のように赤くかがやいた。

「たすけてくれー」
「たすけてくれー」
「わかった、ゆるしてくれ」
殿様も兵たちも、体を二つにおって、手を合わせてなんどもも、なんどもさけびつづけたんだと。
「いくさをやめろー！」「友だちをかえせー！」の声は長くつづいた。

そして、「いくさをやめろー！、友だちをかえせー！」という声が、小さくなったころには、しだいに夜が明けてきたそうな。
買いもとめたはずのてっぽうはな、小えだになり。そこには、ほんの少しじゃが、赤い血とけものの毛がついていたそうな。

すっかりかいしんした殿様はな、くすのきのある峠（とうげ）に、兵をとむらう五輪塔（ごりんとう）と、狐の形をした石の塔（とう）を立てて、二度といくさをしないとちかったんだと。
そのご、村々は大きないくさにまきこまれることもなく、村人は平和にくらし続けたんじゃ。

それからというもの、あの大きな“くすのき”がある峠までの坂道を、「三十ちょう坂」とよぶようになってな、悪い心をもったものがとおると、赤い目の狐があらわれるといわれていると。



熊本県葦北郡芦北町三十挺坂（さんじゅっちょうさか）
1/25,000 地形図八代７号の４「大関山」

７．猿の顔はなぜ赤い

（さるのかおは　なぜあかい）
高知県土佐市猿喰

むかしむかし、海にすんでいたカニは、ふとしたことでクラゲとけんかになったんじゃ。それで、けんかに負けたカニは、クラゲのどくをあびてしまった。
それからというもの、カニは、まっすぐ歩くことができなくなったんじゃ。
それでな、カニたちはしばらくの間、歩き方もぎこちなくなった。
それまで海にすんでいたカニは、新しいすみかをさがし歩いているうちに、川に入りこんでしまった。方向かんかくも、うしなってしまったようだった。

それでも、たどりついた小川での新しい生活は、かいてきであったそうな。
クラゲのすがたもなく、ほかにてきらしいものもなく、食べ物もほうふであったから、クラゲのどくをあびたこの地方のカニは、こうして、陸（りく）にすむようになったそうな。

ところで、カニたちがすむ、沢のおく深くには、猿（さる）がすんでいたんじゃ。
猿たちは、山の木の実をたべものにしていたが、この年は気温が低く、木の実のほとんどが実をむすばなかったんだそうな。
それで、猿たちは、食べ物を求めて山から里（さと）へおりてきたんじゃ。

猿たちが見つけたのは、小川にたくさん落ちている赤くじゅくした木の実だった。
それは、それは、それはとてもおいしそうに見えたそうな。
「おーい、おいしそうな木の実がたくさんあるぞ」
「大きな木の実だぞー」
といって、猿たちは、おく山にはない小川の赤い実をめざして、集まってきたと。

ところが、手をのばすと、その赤い実は、少し動いたそうな。
「･･･おかしいぞ」

「生き物なのかなー？　でもおいしそうだな」
　思いきって、手を広げてつかもうとすると、赤い実は小さなハサミを広げたと。
「イタタタ･･･」
　あちこちで、猿が指をはさまれ、赤い実が声を上げたそうな。
「お猿さん。私たちは木の実ではないですよ」
　木の実だと思っていたものが、話し始めた。声を出したのは、海から小川にやってきた赤いカニだったんじゃ。

「木の実ではないといっても、おいしそうだなー」
　猿たちは、けげんそうなようすで見つめたそうな。再び、赤い実が、いや赤いカニが話し出したんそうな。
「お猿さん、私たちを食べてもいいけどね、私たちは海でクラゲのどくをあびて、よごれきっているんですよ。そのせいで、歩き方はこのように横歩きになってしまったし、病気で体はまっか。それでも食べますか？」
「クラゲのどくのえいきょうがでますよ！」

　カニの話を聞いた猿たちは、そうだんを始めたんじゃ。
「美味しくないだとか、よごれているなどといっているけど、しんじられないな」
「うそにきまっている」
「はらもへっているし、食べよう。食べよう」

　猿たちは、こんどはしんちょうに、手をのばしたんだと。
「待って下さい」
カニたちは､もう一度猿におねがいしたんだと。
「私たちは、いま子そだてのさいちゅうです。ほら、おなかにいっぱいの子どもがいるでしょ

う。この子たちがそだつまで、もう少し待って下さい」
「お猿さんだって、子どもはかわいいでしょ。おねがいします！」
　そういって、小さなカニの子どもがびっしり入ったおなかを見せて、猿たちに、ひっしにたのんだそうな。

　ところが猿たちは、話を聞いてくれなかったんだな。
　カニたちのひめいのような声もかまわず、食べ始めたんじゃ。
　またたく間に猿たちの口は、カニでいっぱいになった。口に入ったカニたちはというと、のみ込まれないようにと、ハサミや足をのばしてふんばったそうな。
　猿の口は、横になったカニでふくれあがり、つっぱった足がほっぺたをさらに広げた。
「いたた！」
「いたたた！」
　それまで白かった猿の顔が、赤くなり、ほおは、はちきれんばかりになったんだと。
　そして、どの猿も、がまんできなくなって、口に入れたカニを、つぎつぎとはきだしたそうな。はきだされたカニは、急いで石の下に。
　顔をはらした猿たちは、しぶしぶと山へ帰っていったんだと。

　それからというもの、猿のほおは赤―くなってな、横にふくらむようになり、二度と赤い沢カニを食べることはなくなったんだと。
　猿が、沢カニを食べそこなった、土佐（とさ）のこのあたりは、「猿喰（さるばみ）」とよばれて、沢にはたくさんの赤いカニがすんでいるんだとさ。

高知県土佐市猿喰（さるばみ）
1/25,000 地形図高知 12 号の１「土佐高岡」

８．太郎と次郎と蛸娘

（たろうと　じろうと　たこむすめ）
岩手県久慈市小袖

むかしむかしある村に、太郎と次郎というふたごの兄弟がすんでいた。
二人は、海へ出て魚を取る、漁師（りょうし）であってな。太郎と次郎は、かっこうも、顔だちもそっくりでな、見分けがつきにくいのだが、

太郎ははたらき者、次郎はなまけ者というのが、村人のひょうばんであったそうな。

秋が深まった大あらしのあった、よく朝のことじゃった。
太郎は、いつもよりもいそいで、海岸にある納屋（なや）へ向かったそうな。漁に使う小船やあみが心配だったからじゃ。
海べにきてみると、納屋はぶじのようであったし、小船も“くい”につながれている。ひと安心した太郎は、おいてあるどうぐが、ぶじであることをねがって、とびらを開けたそうな。

小屋の中を見わたすと、あみや、つりどうぐはぶじのようだった。ところが、すみにおかれた大きなあみの先に、きれいな着物のはしが見えたんだと。
むすめが、ひとりたおれていた。

「なんと、めんこいむすめっ子だろう」
ねむるようにたおれているむすめの顔をのぞきこんだ太郎はいった。
「おい、どうしたんだ。どこからきたんだ」
声をかけ、かたをゆすってみたが、むすめはしんだように動かなかったそうな。
むすめの足はきずついていた。

太郎はな、むすめをせおって家につれて帰り、ねどこに横にしたんじゃが、いつまでも目をさますこともなく、ねむりつづけていたんだと。
それから、なん日もねむっていたそうな。
そのあいだ太郎は、日が上がると漁（りょう）に出かけ、夜になると、ねどこのそばでむすめを見守り、足のほうたいを取りかえていた。

なまけ者の次郎はというと、いつものとおり、漁に出かけるでもなく。日中は、じっと家の中

で、ねむっている“めんこいむすめ”の顔を見てすごし、夜になるとさっさと、ねてしまったそうな。

七日もたったある日。太郎が漁に出かけた後の朝のことであった。むすめは目をさましたんじゃ。
「ながい間、ほんとうにありがとうございました。足のきずもだいぶ良くなりましたので、明日には、私の村へ帰ろうと思っています」
と、ねどこの近くにいた次郎に礼をいったそうな。
「‥‥‥、おれのよめっ子になってくれねべか」次郎が急に声をかけたんだ。
とつぜんのことに、「明日の夜まで考えさせて下さい」とむすめはいった。

元気になったむすめはな、そうじをし、食事のしたくをしたが、昼間は次郎と顔を合わせ、夜は太郎と話をしていることに気がつかなかったんだと。

そして、やくそくの、つぎの日の夜のことだ。
「だいぶ元気になりましたね」漁（りょう）からもどった太郎がいうとな。
「きのうのことですが」
「‥‥‥」太郎には、なんのことか分からなかった。
「たおれていた私をたすけてくれた、やさしいあなたのおよめさんになります。しかし、やくそくしてほしいことがあります」
「え！　私のおよめさんになってくれるのですか」太郎はびっくりした。
「ええ、ですがやくそくして下さいね。昼の少しの間だけは、私の部屋でゆっくり休ませてください」

太郎にとってはな、とつぜんのことであったが、
「きっと、やくそくします」
といったんだと。
そのよく日も、太郎はいつものように、日がのぼると漁に出かけたんじゃ。
むすめが朝食のしたくを終わるころになると、いつものように、次郎がやっとおきてきた。
次郎とむすめは、いっしょに楽しい食事をしての、なまけ者の次郎は、いつものようにひるねをしてしまったそうな。

むすめは、洗い物やそうじ、せんたくの家事（かじ）を終えると、太郎とのやくそくどおり部屋にもどったそうな。
むすめとのやくそくの返事を聞いていない次郎はな、昼ねから目をさますと、
「あのやくそくはどうなっただろうかなー」
といって、むすめの部屋をのぞきこんだんだと。
すると、横になったむすめの小袖（こそで）のすそから、なにかふしぎなものが見えた。
そーっと、きものをめくってみると、それはきゅうばんのついた、たこの足のようなものだった。そして、そこにはほうたいも見えたんじゃ。
手でふれると、ぬるっとした。
そのときだった、小袖を着たむすめがふり向いた。
「やくそくをまもらなかったなー」
次郎は、そうさけんだおそろしーいむすめの顔？を見て、おどろいた。
それは、たこだったから。
「わーーー、太郎ー、助けてくれ」
といって、いちもくさんに、太郎がいつも漁に出かける浜に向かって走り出したんだと。

「助けてくれー」
　小袖（こそで）のむすめが、次郎をおってきたんじゃ。それは、それは、おそろしい顔でな。
「わーーー、むすめがー、たこがー」

　次郎はな、海べの作業小屋にかけこむと、戸をしっかりおさえ、すきまから外をみたんだと。
　すると、小袖をきたむすめ、いや大きなたこはな、小屋をとおりすぎて、そのまま海に入っていった。
　海のそこへ向かったのだろうかの、次郎には、小袖だけが海の上にうかんでいるように見えたと。

　次郎から、話を聞いた太郎はな、夕日が落ちた海べに出て見ると、むすめのきていた小袖（こそで）が、岩の上でゆれているのを見つけたと。

　岩手県久慈市小袖（こそで）
　1/25,000 地形図八戸４号の１、３「陸中野田」

　小袖を手にとった太郎の心の中は、うつくしいむすめのすがたでいっぱいになっての、さみしい気持ちであったと。

　太郎が海岸でたすけて、つれてきたむすめはな、あらしで海のそこから打ち上げられた、たこの化身（けしん）だったのだろうか、太郎には、しんじられないことだった。

　いま、この話がつたわる村の子どもたちは、祭りの日になると、晴れ着として小袖をきるようになっての、やさしい漁師（りょうし）のすむこの村は、「（蛸の）小袖」とよばれているんだとさ。

　次郎はどうしたかって、それからというもの、けっして、たこは口にしなくなったそうな。

９．代太郎と草三郎

　（だいたろうと　くささぶろう）
　大分県玖珠郡玖珠町代太郎
　大分県日田市天瀬町草三郎

　豊後（びんご）の国の山おくに、代太郎と草三郎（だいたろうとくささぶろう）というなかのいい、若い木こりがすんでいたそうな。
　二人は、いつもいっしょに仕事をしていたん

じゃ。
　朝早くから山へ出ては、えだをはらい、木を切り出すのが仕事でな。ちんじゅの森の祭（まつり）には、二人そろって出かけては、夜おそくまで歌い、おどり、楽しんだそうな。

　そんな、となりどうしの二人には、年おいた父母がいた。
　それぞれのお父さんも、お母さんも代太郎と草三郎がおよめさんをもらって、しあわせくらすことをのぞんでいたんだと。

　そうしたある日のこと。いつものように二人は森へ仕事に出かけた。午前の仕事を終わって、ひと休みしているときのことであった。
　小さなにもつをせおった旅人（たびびと）が、とうげ道を下りてきた。
　小道を下りて、近づいてきたのは、ひとりのむすめであったそうな。

「こんにちは」
「どこへ行くのですか、休んでいきませんか」と声をかけると、むすめは二人のそばにこしを下ろし、ぽつりぽつりと話を始めたそうな。

「私は、“ちよ”といい、山むこうの村からやってきたのです。村では、つい先ころ大きながけくずれがあってね、多くの村人とその家がいっしゅんのうちに失われました」

「みうちはすべてなくなり、ひとりぼっちなってしまいました。私は、さいわいなんをのがれましたが、はげ山のあの村はもうこりごりです。そこで、二度とがけくずれにあわない地をさがして、こうして、この村にやってきたのです」

　話を聞いた代太郎と草三郎は、家でゆっくり休むようにと、さそったそうな。二人にさそわれて、ちょっとこまったちよはな、とりあえず代太郎の家のせわになったんだと。
　その代わり、七日ののちにはな、草三郎の家へせわになることをやくそくしたそうな。

　ところが、やくそくの日がきても代太郎はちよをわたさなかったんだと。それどころか、彼女を部屋にとじこめてしまったんじゃ。

　そいで、おこった草三郎はな、みんなねてしまった夜中に、代太郎の家へ向かい、ちよをうばったんだと。
　しばらくの間、草三郎がちよのせわをしたんだが、やくそくの日がくるとな、こんどは草三郎がちよを“なんど（：ものおきのこと）”にとじこめてしまったそうな。

　そして、こんどは代太郎がうばいにいくことになってな。
　このふた月の間に、そんなことがなんどもくり返されたのさ。
　代太郎も草三郎もそれはそれは、しんせつにしてくれるのだが。このさわぎに、ちよは、ほとほとこまってしまったそうな。

　もっとこまったのは、代太郎（だいたろう）と草三郎（くささぶろう）でな。
　それからというもの、二人はべつべつに仕事をするようになって、山仕事もうまくいかなんだ。
　一人では、木の切り出しも、はこびだしも、うまくできないので、生活も苦しくなったんじゃ。

こまった二人は、ちよをつれて、ちんじゅの森でそうだんしたそうな。
「ちよさん、私たちのどちらかをえらんでくれ」と、草三郎がいったと。
「・・・・・」
「おれと、草三郎とどちらにするか、きめてくれ」
代太郎もいったそうな。
「・・・・・」
ところがな、ちよは、なかなかへんじをしないどころか、やっと口を開いたときにはこういったんだと。
「代太郎さん、草三郎さん、こんばん、私はこの神社で休みます。どうぞ、一日だけ考えさせて下さい」

よくねむれなかったよく朝の、やくそくの時間。二人は、いそいで神社の前にやってきたそうな。
ところが、神社のとびらはなかなか開かなかったそうな。
しびれを切らした二人は、「ちよさん、いるのかい」と声をかけながらとびらを開けたんだ。

そこには、手紙が一枚残されていたんじゃな。
「代太郎さん、草三郎さん、ながい間ありがとうございました。二人のやさしさはわすれません。とても、二人の友情をこわすことはできません。私は、父や母がすんでいた海の見える村にもどります」とあったんだそうな。

それで、代太郎も草三郎は、かたを落としたんだ。
ところが、手紙の最後にはこうもあったそうな。
「おせわになった二人に、私の気持ちをのこし

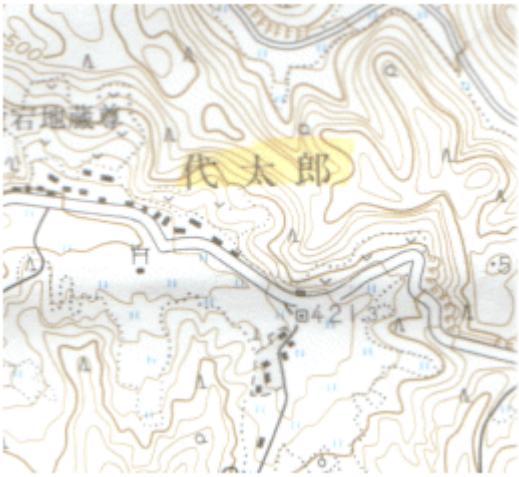
て行きます。なか良くくらして下さい。さようなら。ちよ」

この手紙を、読み終わったときじゃ。
神社のおくから、赤子（あかご）の小さななき声が聞こえたんだ。声の方をのぞいてみると、見なれたむすめのきものにくるまれた、小さなふたごの赤子がいたんだと。

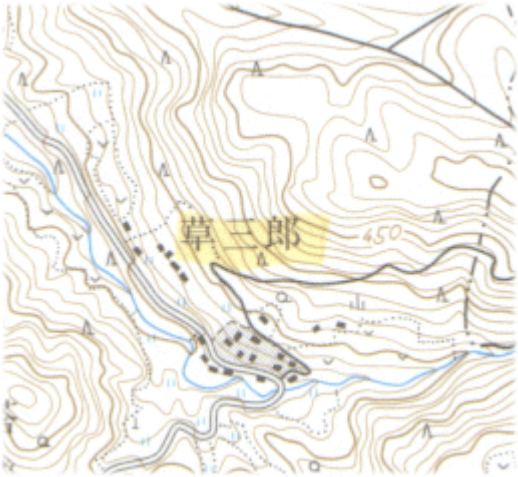
二人はな、むすめのかたみとなった、それはそれは小さな赤子をかかえて、家に帰ったそうな。
代太郎と草三郎はな、それからというもの小さな赤子のためにいっしょうけんめい、そしてなかよく、山仕事にせいを出したそうな。
しかし、あのときから、少しだけはなれてすむようになったということさ。

それにしても、ちよはどこからやってきたのだろうかの。
そして、なにものだったのだろうかの。
山の精（せい）が、森をだいじにする二人のもとにおくった、むすめだったのだろうかの。
それは、だ一れにも、わからないことだった。

今、玖珠町（くすまち）の代太郎と天瀬町（あませまち）の草三郎というところにすむ村人は、協力して山仕事にはげんでいてな。
み一んな、ちよと二人の子孫（しそん）だということだと。



大分県玖珠郡玖珠町代太郎（だいたろうと）
1/25,000 地形図大分 13 号の 3「天ケ瀬」



大分県日田市天瀬町草三郎（くささぶろう）
1/25,000 地形図大分 13 号の 3「天ケ瀬」

１０．女子畑

（おなごはた）
大分県日田市天瀬町女子畑

あたたかなこの国では、男は畑仕事にせいを出し、女子（おなご）は家事（かじ）にせいを出して、なにふじゆうなく、くらしていたそうな。

ところが、この年は天気がわるく、春になっても寒い日が続き、夏には雨が多く、畑の作物はごく少ししか、しゅうかくできなかったんだと。

だからこの年は、村人たちはひもじい思いをしながら冬をこしたそうな。

そして、よく年の春がきて、男たちはいつものように畑仕事を始めたんだが、この年も、寒い日がいつまでも続いたそうな。

そこで、ひもじい小さな子どもをかかえる女たちは、こういって、男たちにうったえたそうな。

「私たちにも、畑仕事をさせてくれねか」

女たち（おなご）は、一つでも多くの豆や野菜をしゅうかくしたかった。

しかし、この村では、「女が畑に出ると、“畑の神”がおこる」といういいつたえがあってな。男たちは、ゆるさなかったそうな。
「とんでもないことだ、女子が畑に出ると、畑の神がおこって不作（ふさく）になる」
「ばかなことをいうでない」
「これ以上不作になったら、うえじにだ」
と、男たちは、口ぐちに反対したそうな。
しかたなく、女たちは今までどおり、家事にせいを出したと。

ところが、天気は、かいふくしなかったんだな。寒い日が続き、男たちの作る豆や野菜は立ちかれてしまった。

男たちは、わずかに取れた豆と山の木の実をさげて帰ってきたのだが、その男たちのすがたは、遠くから見てもさびしそうに見えたそうな。

ところが、「おかえり」、「お父さん、お帰りなさい」と、女や子どもたちの元気な声が、仕事から帰る男たちをむかえてくれたそうな。
「どうして、おまえたちはそんなに明るくしていられるのだ？」
男たちはたずねたそうな。
「お父さん、大じょうぶ」
「私たちがなんとかします」
「・・・・・」
「これを食べましょう」

女たちが、とつぜんさし出した大きないもの山に、男たちはおどろいたんだと。
「どうしたのだ？」
「ひみつの畑でね！」

女たちは、男たちにないしょで、畑をたがやし、いもをうえていたんだと。

家事（かじ）のあいまの畑仕事だから、すこししか手をかけなくてもせいちょうする、いもをうえたのがさいわいして、わるいてんこうの中でも実をむすんだと。
「これで、ひもじい思いをしないですむ」
「ありがとう、ありがとう」
と、男たちは女たち（おなご）に大へんかんしゃしたそうな。

それからというもの、この地方では女たちも畑仕事をてつだうようになり、男たちも家事をてつだうようになったんだと。
そして、女たちが男たちにかくれてたがやしていた、畑のあったあたりを、今では女子畑（おなごはた）とよんでいるとさ。
もちろん、女子たちは大のいもずきだー。

大分県日田市天瀬町女子畑（おなごはた）
1/25,000 地形図熊本１号の１「日田」

１１．山姥の赤子

（やまんばのあかご）

和歌山県日高郡日高町産湯峠

むかしむかし、紀伊の国（きい：いまのわかやまけん）の山おくに、頭といわず、足といわず、どこまでも大きな山姥（やまんば）がすんでいたんだと。

山姥（やまんば）のすみかは、ふかい森のまもり神（かみ）のような大木（たいぼく）にあいた″うろ（あな）″にあってな、ひとりさびしくすんでいたそうな。

それでも、ときには、村人や木こりが道にまよって、ちかくにくることがあったから、山姥はそれをおどろかすのを、いちばんのたのしみにしていたそうな。

その山姥（やまんば）がすむ、ふかい山からくだったさとには、とても子どもがたくさんいる、にぎやかな村があっての、村人はしあわせにくらしていたんだと。

さとの村人が、なぜ、子どもにめぐまれていたのかというとな。

村のはずれに、小さなほこらがあっての、そのうらには、これも小さなどうくつがあっての、ここをくぐると子どもにめぐまれるという、い

いつたえがあったそうな。

この村のよめっこは、一人のこらず、このどうくつをくぐっては、そばにあるほこらでおねがいをした。もちろん、どうくつもくぐった。

するとな、どのよめっこもたくさんの子どもにめぐまれての、おかげで、この村はいつもにぎやかであったと。

あるとき、山にまよいこんできた村人から、この話をきいた山姥（やまんば）は、「おらも、赤子（あかご）がほしいな」と、思うようになったんだと。

そして、ある日のことじゃった。

山をおりて、ねがいことをしようと、その小さなほこらのうらにある、どうくつに入ろうとしたそうな。ところが、山姥の体は大きくての、どうくつには体どころか、頭さえも入れなかったんだと。

それでも赤子（あかご）がほしい山姥はの、ほこらの前であたまをさげ、体をちょっと小さくして、男のような太くて、大―きな声でおねがいしたそうな。

「ほこらのかみさま！　どうぞ私にも赤子をさずけて下さい、おねがいしますだ！」

そうすると、ほこらの中から、かみさまの声がきこえてきたと。

「山姥よ、どうしても赤子がほしのか？」

「はい、かみさま、どうしても、かわいい赤子がほしいだ！」

「そうか、赤子がほしいか。

山姥よ、ここでおまいりをし、このどうくつをくぐれば、赤子がほしいという、おまえのねがいがかなえられることはわかっているな」

「はい、わかっていますだ、かみさま」

「そうさなあ、その体ではどうくつをくぐれな

いだろう。
　ねがいをかなえるには、このあながくぐれるくらいに、おまえの体が小さくなるのだが、それでも赤子がほしいのかな」
「はい、どうしても、どうしても赤子がほしいだ！　なんとかおねがいしますだ、かみさま！」と、山姥は大きな体をちぢめるようにして、つよくおねがいしたんだと。
　山姥のつよいねがいをしった、かみさまは、こういったそうな。
「それでは、これからも、日にいちど、それも、まい日、おまいりにくることをやくそくしなさい。そうすれば、きっと体が小さくなり、どうくつがくぐれるようになり、ねがいがかなうだろう」
「はい！　ありがとうございますだ、かみさま！」

　元気よくへんじをした山姥は、さっそく、つぎの日から、まい日かかさず、おく山から里（さと）へ出ては、おねがいしたのだが、六日たっても、七日たっても、体にはなんのへんかも見えなかったそうな。

　八日目のあさのことだった。
「うーん、肩（かた）がつかえるうー！」
　山姥は、ためしにどうくつに体を入れてみたんだが、すぐにつかえてしまった。それどころか、体がぬけなくなってしまった。
　外に出ているからだをぶるぶるふるわせて、なんとか、どうくつの岩にはさまれた体をぬいた山姥は、頭からながれるあせを、手でふきながら、よーく考えてみた。
「いぜんは、頭も入らなかったはず。そうだ、少しずつ小さくなっているだ。もうすこし、がんばってみるだ」

　山姥（やまんば）は、それからもまいにちかかさず、小さなほこらのある村のはずれにやってきてはの、おねがいをついづけたそうな。
　そして、ひと月もたったある日、山姥は、ついにどうくつをくぐれるほど小さくなったんだと。
「おーら、わしもこのどうくつがくぐれただ！　これで、わしにも赤子がさずかるだ！　赤子がさずかるだ！」
　山姥は、うれしさのあまり、りょう手を上へあげておどりだしてしまった。そしてその日は、なんども、なんども、どうくつをくぐっては、ほこらの前で「赤子が、さずかりますように！」と、おねがいしたそうな。

「一日に一どだけ」という、かみさまのいいつけなど、わすれていた。
　そして、すっかりつかれてしまった山姥は、ほこらのわきでいねむりをしてしまった。
　そこへ、村のよめっこがひとり、赤子をさずかりたいと、おねがいにやってきたそうな。どうくつをくぐり、ほこらの前でおいのりをしていると、そばのしげみの中から、赤子（あかご）のなき声がきこえてきた。

「ほー、かみさまのごりやくは大いしたもんだ」
　よろこんだよめっこは、ちょっと体のよごれた、女の子をだいて村へかえったんだそうな。
　日になんども、おねがいをした山姥（やまんば）は、ねこんでいるうちに、小さな赤子になってしまったんだな。

　よめっこは家にかえると、ほこらのまえのできごとをかぞくに話し、そだてることにした。
「わしのうんだ子ではないが、かみさまからさずかった赤子だから、大切にせねばならないな。

それにしても、ずいぶん、よごれた赤子だなあ」と、よめっこはそういって、さっそくお湯（ゆ）にいれたんだと。

お湯の中の赤子は、いくらあらっても色は白くはならなかったと。それに、あまりきりょうよしではなかったけれど、くろ目が大きくての、元気な子だったあ。

よめっこは、すこしでも色が白い、きりょうよしのむすめっこになってほしいと、まいにち湯に入れたそうな。

ところが、赤子はお湯がきらいでなあ、よめっこが体をふくたびに、おく山までとどくような、それは、それは大きな声でないたと。

そして、なくたびに大きくなると思えるほど、じょうぶにそだったそうな。

それからのち、この山おくに山姥のすがたは

和歌山県日高郡日高町産湯峠（うぶゆとうげ）
1/50,000 地形図田辺１３号「御坊」

見えなくなり、いつしか、このほこらのあったところを、産湯峠（うぶゆとうげ）とよぶようになったと。

あの赤子は、はたらきもの大きなむすめっこにそだっての、よめにもいったけれど、おしりが大きくて、どうしてもあのどうくつだけはくぐれなかったと。

でもの、子にはめぐまれたそうな。めでたし、めでたし！（08.09 更新）

発行日：2006 年 5 月
著　者：やまおか　みつはる
発行所：オフィス　地図豆

定価（税込み）　500 円（477+税）

「オフィス　地図豆」
（店主　やまおか　みつはる）
〒300-1237　茨城県牛久市田宮 2-18-3
tel：029-830-7511
http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/
Copyright 2008 オフィス地図豆